



パトリック・ハーラン

「国際的人生」は、楽しい！

混ざりあいながら、自分のエネルギーにしていまう。

23歳で来日して、もう26年。

日本を拠点に活動するお笑いタレントのパックンこと、パトリック・ハーランさん。バックボーンが異なるこの国で、舞台上に司会にどんな活躍の幅を広げ、たくましく輝くパックン流の、異文化コミュニケーション術とは？

最初は「不思議」の連続！
ストレスを感じたら、
「思考の転換」で乗り越える。



—忘れられないカルチャーショックは？

いろいろあるけど、まず「ラジオ体操」。最初、専門学校で英会話の先生を始めたんだけど、職員が皆同じジャンパーを着て「斉に同じ体操をするのでビックリ！

その職場では休みをあまり取らないのも驚きました。有給休暇が20日あっても、すべて使い切っている人を見たことがありません。あと、あまり必要とは思えない会議が多い。仕事が終わっても帰らない人がいたり…。言いつけは「帰らなさい」ですよ！

でも、それを「不満」と言ってしまうと、「ここは日本だから…」となるから、自分では「不思議」と言

うようにしていました。

—外国人に対する「差別」を感じたことはありますか？

以前住まいを探してたら「ピアノ可、ペット可、外国人NG」と書いてあってさすがに「なんで!？」と思いました。ゴミの分別を間違えてないのに、ウチの前で分別できてないゴミ袋を置かれたこともありました。在日外国人は分別の仕方が分からないんじゃないかと思ってたんですけど…。調べたら近所の日本人のものと同じでした。ちなみにその人は、引っ越すときもゴミの分別をしないまま、結局、僕が処分したんです。

「みんな手を上げて〜。質問ない人下ろして〜」という方法とっています。こうすると下げる人が何人かいて「ちょっと聞いていいですか」と質問が出てきますので。

日本人は、学ぶ力や倫理水準が高い。
でも、自分を表現するのは苦手かも…。

—日本の教育と、
アメリカとの違いは？

日本人の学力は世界のトップ5に入っていると思います。しかも国民全体のレベルも高い。アメリカには突き抜けた人が多くいるけど、残念ですが格差が激しいですから…。

たとえば、日本人で地球温暖化を信じていない人はほとんどいないでしょう。でもアメリカは違います。しかも、間違った思い込みにもかかわらず専門家のような口調で「自分は正しい」と言い張る人が結構いると思います。

それに日本人は、社会を守ろうとする倫理水準も高い。僕がそう感じたのは去年財布を無くしたときです。財布は、その日のうちに警察署に届けられていたんです。アメリカの車で同じことがあったときは戻ってこなかったですね。警察に行っても「それで？」と、ぞんざいな対応をされただけでした。

—大学では、
若い人たちを教えていますね？

国際関係理論の講座を持っていますが、「僕は専門家ではないので間違ってたと言っはしいし、おかしいと思うたら質問してほしい」と学生に伝えています。でも、発言の数が少ないので、



「みんな手を上げて〜。質問ない人下ろして〜」という方法とっています。こうすると下げる人が何人かいて「ちょっと聞いていいですか」と質問が出てきますので。

期末にはレポート提出を求めるのではなく、全員参加でプレゼン大会をします。受講者をグループに分けて、一人ひとりのプレゼンを順番に評価するので。

そのやり方を僕は「建設的批判」と呼んでいるんですけど、批判というとネガティブなイメージが日本にはあるので、それぞれが褒め言葉を挟む「サンドイッチ批判」をします。まず良い点を挙げて「でも*が分かりづらい」とか、改善点をちゃんと伝え合います。

日本人はたしかに自己表現はあまり上手くないと思うけど、教育改革によって、表現力コミュニケーション力、クリエイティブの底上げをはかり、もっと突き抜けた人が増えるといいなと思います。

—これまでどうやって、
多くの「不思議」をクリアしましたか？

お笑いタレントなので、笑い飛ばしたりネタに変えたりしてきました。僕の好きな言葉に「思考の転換」というのがあって、「*しないといけない」は「させられている」と同じだから、「*したい」と考えて行動します。

たとえば外国人という理由だけで住宅ローンが組めないなら、組める銀行や不動産会社をとにかく探します。

「探さなければならぬ」ではなく「探したい」と考えるようにしました。

探した結果、断られた物件より条件の良いマンションが買えました。本当ですよ。自分にとって「ハードル」と感じることを、二つひとつ乗り越える努力をしてだんだん味方を増やしていくと、必ず自分のためになります。相手を理解しようとする、自分自身が人として大きくなろうと思うこと、それが大事です。

誰でも、「こんにちは」
から始めよう！

—パックン流は「相手の話を聞く」
こと、からですね。

そうですね。分からないこと、理解できないことは、物おせせずになんでも聞きます。もちろん自分の常識と相手の常識の違いがあることも多い。日本語の「違う」という言葉には「異なる」と「間違っている」の2つの意味があつて、僕は「間違っている」ではなく「異なる」と受け止めています。つまりオープンマインド。心を開いて相手を理解しようします。相手を大切に思い、愛を持って接することが大切だと思います。

僕は誰に対しても、どこに行っても、相手への接し方はまったく同じです。まず人の話をしっかりと聞く、そして相手に興味を持つ、それが秘訣です。「名前は？」「ここでは何がおいしいの？」とかですね。相手がシャイな人でも、そうやって「歩ずつ対話を重ねていくと必ず仲良くなれます」。

—近所づきあいは積極的な方ですか？

はい。休日にはPTAのソフトボールとか卓球とか、いろいろ誘ってくれます。皆うまいですよ。お祭りになると、近所の神社にパックン・マックスの提灯がぶら下がります！近所の家族とバーベキューやビザパーティーの後で子



どもたちと花火を楽しんだり…。日本語的には「近所となじむ」ってことでしょけど、僕は「混ざりあえばいい」と思うのです。無理して溶け込まなくてもいい、でも混ざりあわないとつまらない。

—構えずに、ふれあうってことですね。

外国人への最初のあいさつは「ハロー」じゃなくて「こんにちは」でいい、「ハロー」は固定概念の象徴だと思います。相手は観光客ではなく、日本に長く住んでいる人かもしれないし、英語圏以外の人かもしれないですよ。そして、かしまらずに話すこと。「スポーツやる？」とか「出身地の自慢は？」だけでも30分くらい話せます。

—最後に、若い人たちへのメッセージを。

大阪の皆さんも「地球人の一人だ」と自覚を持って、「外国人と日本人」ではなく「人と人とのつき合い」をして、人生を豊かにしてほしいです。

バックボーンの違った人と会い、交流するのは、その大きなチャンス。視野が広がるし価値観も変わるから、自分が抱えている問題の解決につながるかもしれません。いろんなバックボーンを持った人たちとつながる「国際的人生」は、楽しいものです。

パックン(パトリック・ハーラン)

1970年、米国・コロラド州出身。93年ハーバード大学比較宗教学部を卒業、同年来日。福井で英会話教師をした後、東京へ。97年吉田真とパックンマックスを結成。「爆笑オンエアバトル」で頭角を現し、個人出演した「英語でしゃべらナイト」も人気を博す。お笑い芸人の枠を超え、司会、コメンテーター、俳優など幅広く活躍中。12年から東京工業大学非常勤講師。近著は『パックンの「伝え方・話し方」の教科書 世界に通じる子を育てる』(大和書房)、『「日本バイアス」を外せ!』(小学館)など。2児の父。